『敦煌寫本研究年報』第十號（2016.03）95-108 頁

敦煌本『文心雕龍』研究事始

——初期敦煌學の一齣*

永田知之

一、はじめに

日本の大正十五年、中國の民國十五年である 1926 年の五月と六月に京都と北京で二篇の論文が發表された。これらは敦煌文獻 S.5478、つまり『文心雕龍』の寫本を材料に用いた論著の先驅とされる。現存する典籍の中で、『文心雕龍』は中國で最古の、また最も體系性を備えた文學理論の專著として名高い。日中雙方でほぼ同時に、同じ寫本を扱う研究が登場した背景には、どのような事情があったのか。寫本の利用を可能にした經路や『文心雕龍』を初めとする文學論・批評分析の勃興からこの問題を檢討すれば、当時の古典文獻學や敦煌學の研究に見られる傾向、また S.5478 の發見が『文心雕龍』研究史に占める位置を考える一助ともなるのではないか。小論ではこのような見込みの下で、若干の知見を示したい。S.5478 自體の情報には追々言及するが、まず二篇の論文とその著者について見ておく。

二、鈴木虎雄による『文心雕龍』のテクスト研究

鈴木虎雄（1878–1963）、號は豹軒、新潟縣西蒲原郡粟生津村（現燕市）で漢學者の家系に生まれる。東京帝國大學文科大學漢學科を卒業（1900）した後、東京高等師範學校教授等を經て、京都帝國大學文科大學助教授に着任（1908）、のち教授（1919）を務める。退官後は名譽教授の稱號を受け（1938）、帝國學士院會員に選定された（1939）。戰後、文化勳章を授與される（1961）。專門は中國古典文學で、特に古典詩と詩論に關する業績が名高い[1]。さて、その鈴木が著した「燉煌本

*小論は日本學術振興會科學研究費補助金「中國典籍日本古寫本の研究」（基盤研究 A、研究代表者：高田時雄京都大學名譽教授）による研究成果の一部である。

[1]鈴木の經歷は吉田町教育委員會（1964）、興膳宏（1995）229–238 頁參照。

文心雕龍校勘記」（1926）は、S.5478 全體の錄文とそれを清・黃叔琳『文心雕龍輯注』と對照した結果を示す主要部に先立って「一　校勘記の前に」と題する文章を置く。校勘記の凡例となる箇所を除いて、その大部分を次に擧げる。

> 「文心雕龍」の支那文學を研究する者にとりて重要なる書なることは言ふまでもなきことなるが、如何にせん其の古書なる故を以て文字の誤脱等尠からず、而して之を訂補するの方法に乏し。支那の校勘家の謂ふ所の宋本元本といふ者の如きは殆ど之を得るに難く、之を得たりと稱する者も其の價値の如何なるや頗る疑ふべきものすら之あるに至る。明淸の校勘家凡そ數十人の姓名を聞くも其等の著書さへもその二三を除く外は容易に之を窺ふこと能はず。此時にあたりて我が内藤湖南博士は巴里より燉煌本文心雕龍を將來せられたり、誠に學界の一大快事といふべし。燉煌本は草書を以て記さる。書體其他によりて考察するに恐くは唐代の筆寫にかゝるものならん。内容は原道第一の贊の尾凡十三字に始まり、次に徵聖第二以下各篇備はりて雜文第十四に至り、最後に諧讔第十五は其の篇名のみを存して本文を闕けり。卽ち「徵聖」より「雜文」に至る十三篇は完存す。是蓋し現存する雕龍の最古本なり、豈に貴重せざるべけんや。而して此本の貴重すべきは單に其の古きが故を以てには非ず、之を「太平御覽」等に對校するに互に合致する處多しと雖も其の相異る處亦決して尠からず。余は此本の全く獨立の系統に屬するものなることを信ずるものなり。獨立して而かも讀者をして「是なるかな」と感歎せしむる箇所の多き、是其の最も貴重すべき要點なり。此本の筆寫の誤は往々にして之あり班を斑とし觀を親とするの類是なり。此等は望んで其の誤たるを知るべく、以て其の眞價に累を及ぼすに足らざるなり[2]。

S.5478 の解題として、最低限の事柄はここに盡くされていよう。『文心雕龍』は五十篇から成るので、當該寫本には全體の四分の一強が見えることになる。引用した文章に續いて、「二　燉煌本文心雕龍原文」と「三　燉煌本文心雕龍校勘記」が置かれる。鈴木はこの三年後に、敦煌本を含む多くのテクストを用いて、同書の全體を對校した「黃叔琳本文心雕龍校勘記」を公にした。その「第一　緒言」の約三分の一と「第二　校勘所用書目」の一條を擧げる。

> 大正乙丑春。斯波吉川二子。在大學。課以文心雕龍。因校諸本。相共讀之。二子用工甚力。起予之言不尠。課讀所用。以黃叔琳輯註附載紀

[2]鈴木虎雄（1926）979–980 頁。なおこの「校勘記」は同（1927）77–127 頁に再錄。

> 畇評本・及養素堂板黃氏原本・爲本。傍及諸書。憾插架單薄。宋元舊刻。概無由窺。雖則明刻。或未及採蒐。……於是。予慨然奮起。努任校讎。善本雖不多得。而左右所置、可以供用。凡予之所見。與所未見。書目列記於下。若文鏡秘府論・燉煌本者。西土學子。固不經見。……論校語之得失。則請俟世之賢者。昭和三年。十月十八日。
>
> 一燉煌本文心雕龍
>
> > 燉煌莫高窟出土本、蓋係唐末鈔本、自原道篇贊尾十三字起、至諧讔第十五篇名止、文學博士内藤虎次郎君自巴里將來、余與黃叔琳本對比、大正十五年五月、既有校勘記之作、今之所引、止其若干條耳、余所稱燉本者、卽此書也、[3]

「大正乙丑」、卽ち十四年（1925）に後年、廣島大學教授として日本における『文選』研究の泰斗となる斯波六郎（1894–1959）、鈴木と同じく京都大學教授を務め、中國文學の研究を領導する吉川幸次郎（1904–1980）が列なる授業で『文心雕龍』が素材に使われていたことが窺われる。二人は年齢こそ十歳も異なるが、京都帝國大學文科大學支那語學支那文學專攻の同級生であった。一級違いの後輩（網祐次）によれば、彼らは演習の責任者だった[4]。

「緒言」の後に、鈴木による敦煌本の紹介を擧げた。先に引く數年前の「燉煌本文心雕龍校勘記」の「校勘記の前に」に比べれば、記述はごく簡略である。また、校勘の方も著者が述べるとおり、意味がある異文しか掲出しない（これは他の刊本についても等しい）。一つ注目すべきは、嘗て「校勘記の前に」で單に「唐代の筆寫」と稱した點が「蓋係唐末鈔本」となっていることだろう。鈴木が範圍を狹めた理由は、いま詳らかでない。また、S.5478 の年代に關しては、避諱（後掲の趙萬里の文章參照）から分析は進められているが、なお定論は無い[5]。いずれにせよ、「燉煌本文心雕龍校勘記」（五百條以上に及ぶ異文を注記）等は後の『文心雕龍』研究に影響に與えた。ただ、今はもう一件の校勘にひとまず話題を改めたい。

三、趙萬里の敦煌本『文心雕龍』校勘

趙萬里（1905–1980）、字は斐雲、浙江海寧の人。東南大學國文系で學んだ後、淸華學校國學研究院の助教に採用された（1925）。やがて北平北海圖書館（國立北平圖書館）に轉じ（1928）、善本部主任などを歷任する。人民共和國建國後は、北京

[3]鈴木虎雄（1929）159–162 頁。「昭和三年」は、發表の前年（1928）に當たる。
[4]網祐次（1969）6 頁。因みに彼らは『文心雕龍』を「スラスラと讀」んでいたらしい。
[5]S.5478 の校錄・研究の歷史は林其錟・陳鳳金（2011）7–12、69–194、863–864 頁參照。

圖書館研究員を務めた。研究領域は中國文獻學の廣い範圍に及ぶが、殊に目錄學・書誌學上の業績で知られる[6]。彼の「唐寫本文心雕龍殘卷校記」は前節で論及した鈴木による最初の校勘記からわずか一箇月後（1926 年 6 月）に發表された。次に趙の校記より、校勘に先立つ前書きの全文を掲げる。

> 敦煌所出唐人草書文心雕龍殘卷、今藏英京博物舘之東方圖書室。起徵聖篇、訖雜文篇、原道篇存讚曰末十三字、諧讔篇僅見篇題、餘均亡佚。每頁二十行至二十二行不等。卷中淵字、世字、民字、均闕筆、筆勢遒勁、蓋出中唐學士大夫所書、西陲所出古卷軸、未能或之先也。據以迻校嘉靖本、其勝處殆不可勝數、又與太平御覽所引、及黃注本所改輒合、而黃本妄訂臆改之處、亦得據以取正、彥和一書傳誦于人世者殆遍、然未有如此卷之完善者也。去年冬余既假友人容君校本臨寫一過、以其有遺漏也、復假原影本重勘之、其見于御覽者亦附著焉。卽以三夕之力、彙錄成校記一卷、序而刊之、以質竝世之讀彥和書者。丙寅花朝日記[7]。

文中の「彥和」は、梁・劉勰（『文心雕龍』の撰者）の字である。當否はさておき、「闕筆、筆勢」による年代の推定などは、鈴木の「校勘記」に比べて考證が詳しいといえる。當時においては嘉靖十九年（1540）刊本等の明版、今日でも元・至正十五年（1355）刊本より古い完全なテクストが見られない『文心雕龍』の校勘で、同書を度々引用する宋代の文獻は、大きな助けとなる。そういった理由から『太平御覽』を校勘に用いる姿勢は、趙萬里も鈴木と變わらない。その上で、更に遡る寫本として、彼らは敦煌本を重視するわけである。

さてこの文章で趙萬里は「友人容君」より敦煌本の「校本」を借りたと記す。これは趙と交りがあった容庚（1894–1983）か弟の容肇祖（1897–1994）[8]を指すものか。假にそうだとしても彼らには出國の經驗が無いので、S.5478 の影印は他者を介して得たと考えられる。次に少し方向を改めて、鈴木と趙が敦煌文獻の存在を知り、寫しを入手した經緯を考えたい。

四、S.5478 關連情報・影印の獲得經路

前々節に擧げた「燉煌本文心雕龍校勘記」と「黃叔琳本文心雕龍校勘記」の引用に見えるとおり、鈴木に敦煌本の寫眞を贈ったのは、東洋史家の湖南こと内藤虎次郎（1866–1934）である。彼らは、京都帝國大學文科大學の教授として、同僚の

[6]趙萬里の經歷は趙芳瑛・趙深（2011）に詳しい。
[7]趙萬里（1926）97 頁。彼のこの「校記」はのち同（2012）358–385 頁に再錄。
[8]容庚は王國維（趙の上司）の知遇を得た。容兄弟については東莞市政協（2004）參照。

關係に在った。内藤は、これより先、大正十三年（1924）に、歐州へ敦煌文獻の調査に旅立った（歸國は翌年）[9]。その際に得た數多い寫しの中に、S.5478 のそれも含まれていた。この資料に基づいて鈴木が著した「燉煌本文心雕龍校勘記」は、内藤の還曆を祝う論文集に相應しい論考といえるだろう。

鈴木が校勘記二篇の前置きとなる文章で共に、敦煌本『文心雕龍』（の寫眞）は「巴里」から「將來」されたと述べるのは、やや奇異に思われる。S.5478 は、言うまでも無く英國所藏の敦煌文獻である。從って、鈴木の記述は誤りなのだが、實はそれにはもっともな理由が存するようだ。内藤がまず調査に向かった大英博物館の擔當者は、必ずしも協力的ではなかった。それに對して、パリの方では各方面の協力を得て、結果は上首尾なものといえた。

> 拜啓歐洲滯在期日も已に切迫致しビブリオテーク・ナショナルの敦煌遺書も三百種ばかり閲覽寫眞、ロトグラフの數も五十餘種に上るべく其外手寫せしものも數十種あり文學上の新らしきものも有之いづれ御參考になるもの可有之存候その爲費用も隨分かさみ亞米利加を見棄て候本月廿八日馬港出發歸途につき可申候……
>
> 十二月三日　　虎頓首
>
> 豹軒博士侍史[10]

内藤が鈴木に宛てた、大正十三年の書簡から引用した。旅の終わりに予定していた米國行きを諦めるほどに複製費がかさむ、言い換えれば大量の資料を得られた喜びが傳わる文面である。思うに、鈴木はこのような内藤の書信、あるいは歸國後に交わした會話などからパリでの調査の順調さを強く印象付けられたのではないか。そのため、内藤が歐州で得た成果を概ね滯佛中のそれと錯覺した可能性がある。S.5478 に關する誤解も、これに兆すと思しい。

このように内藤の將來品に直接の情報を仰ぐ鈴木と異なり、趙萬里のいう「原影本」（影印）の出所は定かではない。ただ S.5478 の現物を内藤より二年早く目睹した中國人が存在した。

内藤と研究上の連攜を持った董康（1867–1947）が、その人である。彼による敦煌文獻の實見調査及び記錄については、既に研究がある[11]。それらに據れば、民國十一年（1922）の十月から十二月に、董はパリとロンドンで相當數の敦煌遺書

[9]内藤の調査旅行に關しては高田時雄（2008）に據る。

[10]内藤虎次郎（1976）562 頁。句讀點は無いが、「閲覽」と「存候」で文章は切れる。

[11]史睿・王楠（2011）。記錄については芳村弘道（2010）69–70 頁も參照。内藤と董康の敦煌文獻研究における協力を示す資料の研究・影印に玄幸子・高田時雄（2015）がある。

を目にした。後に彼が編んだ調査記録『敦煌書錄』（1942 年轉寫本）が上海圖書館に藏せられるが、その一節にこういう。

S.5478　Ch932　文心雕龍唐寫本　蝶裝章艸四三二行
黏連一小册自徵聖第二起至諧讔第十五目止[12]

「S.5478」、「蝶裝章艸四三二行」は朱筆で記される。當該寫本に關する記述は、これだけに過ぎない（筆者が實見）。だが、董康は英佛で得た敦煌文獻の寫しを中國に持ち歸っている。時期から考えて、趙萬里が提供を受けたという S.5478 の「原影本」も、あるいはその流れを汲むものだったかもしれない。この推測の當否は今後の調査に俟つが、1920 年代前半に日中雙方の研究者が敦煌本『文心雕龍』の情報に意を留めた點は、本節に引いた資料より明らかであろう。次節では、鈴木と趙の校勘記が初期敦煌學において持つ意味を考えてみる。

五、鈴木虎雄と趙萬里が初期敦煌學に占める位置

鈴木が S.5478 をパリ所在の寫本と誤解した、その理由の推測は前節で既に述べた。内藤が寫眞を提供する際に、出所を詳說したかは定かでないが、少なくともスタイン所獲品ということは、鈴木にも傳わっていた。それを示す詩が、内藤がなお歐州に在った頃（1924 年末）の雜誌に見える。なお詩の中の太字は韻字、丸括弧内のそれは原注を表す。

想見秋蛇簡色寒。遺編何日事鉛丹。封中疑帶古香氣。尺素展來幾度看。
（右聞斯坦因蒐錄中有草體文心雕龍寫眞成）（鈴木虎雄「次湖南博士詩韻二首」[13]）

二首から成る連作の第一首を擧げた。内藤湖南による原唱の方も、同じ雜誌に載っている。ここでは、内藤が鈴木に宛てた葉書に基づくそれを擧げておく（句讀點は無い。太字は韻字）。

寺田學士索題英國古地圖
四海縱橫盟已寒名都秋色木將丹要知雄國興衰跡試取圖經子細看[14]

[12]玄幸子・高田時雄（2015）458 頁に當該箇所の影印が見える。ここを含む董康の目錄を歐州渡航前の内藤が寫していた點は同 353 頁の寫眞や同 96 頁の錄文より明らかとなる。
[13]藝文（1924）35 頁。鈴木の門人が彼の退官時に獻呈した鈴木虎雄（1938）卷九に再錄。
[14]内藤虎次郎（1976）558 頁、藝文（1924）35 頁。1924 年 10 月 5 日にパリより發信。

内藤がS.5478の「寫眞」完成を鈴木に報じた書信は、いま見られない。ただし、詩の自注で「斯坦因蒐錄」という以上、鈴木もそれがスタインの收集品だということは知っていた。

今日、「パリにあるスタイン所獲敦煌文獻」などといえば、粗忽の謗りは免れまい。ただ1920年代という敦煌學がまだ草創期に在った時代、北京所在の寫本を除く資料閲覽の便宜が限られる日中の研究者において、傳聞による情報の混亂は現に存在した[15]。またいわゆる專門家としての敦煌學者がなお現れていない狀況下では、これは止むを得ない現象だった。もっとも鈴木の誤謬は、主に當人が抱く興味の程度に起因しよう。『文心雕龍』の校勘を除いて、彼には敦煌寫本を用いた業績は全く見られない。因みに、趙萬里の方には「魏宗室東陽王榮與敦煌寫經」(1943)と「唐寫本說苑反質篇讀後記」(1961)と題された論文[16]がある。

前者の表題にいう「敦煌寫經」は中村不折舊藏品(臺東區立書道博物館現藏『觀世音經[17]』)と中國國家圖書館藏品(BD05850『大智度論』)、後者の「唐寫本」は蘭州圖書館舊藏品(敦煌研究院328)を指す。『文心雕龍』を校勘した後の趙萬里が敦煌文獻を主な材料に用いた論文は、これらに止まる。一方は北魏の史實を論じるために寫經の題記を用い、もう一方は中國西北部に傳存した寫本を對校の校勘に用いる。敦煌寫本は考證・校勘の材料に供されるのみで、資料としての獨自性は強調されない。結局、趙萬里も「敦煌學者」ではなかったのである。

それでは、敦煌寫本自體への關心は必ずしも高くない彼らの如き研究者がその利用に手を染めた要因は、どこに求められるのか。鈴木が長らく身を置いた京都は、敦煌學搖籃の地の一つとされる。明治四十四年、宣統三年(1911)、そこに亡命した羅振玉(1866–1940)・王國維(1877–1927)と内藤ややはり京都帝大文科大學教授の狩野直喜(1868–1947)との遭遇がそれに大きく關わることは、もはや說明を要すまい。内藤と狩野を含む京都帝大の研究者複數名は、敦煌資料の調査を目的の一つとして海外に赴いた[18]。京都を活動の中心とする東洋學者の中で、この動きに超然たる位置を占めたかに見えるのが、實は鈴木であった。

受業生の吉川幸次郎は、こう述べる。「大正年間の中國文學研究は、日本の學界も中國の學界も、戲曲小說など虛構の文學の研究に專心し、杜詩などはほとんど忘れた時期であった。しかし先生は杜詩を守りつづけられた」[19]。文中の「戲曲小

[15]例えば王國維はペリオから寫眞を得たために敦煌文獻中の『切韻』、卽ちS.2683・S.2055・S.2071をパリ所在の寫本と誤解していた。高田時雄(2002a)237–239頁。

[16]趙萬里(1943)、同(1961)。同(2012)404–407頁、同(2011)474–480頁。

[17]中村不折(1927)卷中に題記の錄文、書苑(1942)41–42頁に寫眞を載せる。

[18]日本側の當事者などの回想に内藤虎次郎(1970)222–233頁、神田喜一郎(1984)245–282、350–369頁がある。昭和初年までの調査に關しては高田時雄(2003)參照。

[19]吉川幸次郎(1969)306頁。

說など虛構の文學」を「新たな資料だけに基づく新領域」に、「杜詩」を「傳統詩文」に置き換えても、鈴木（引用中の「先生」）の學問を示すこの記述の意圖は、そう損なわれまい。内藤による資料提供という特殊な事情があったにせよ、その彼が生涯で一度だけ（業績としては二篇だが）、出土文獻に關わったわけである。この事實は、彼のような學者にも影響を及ぼすほどに、大正期の京都における東洋學の中で、敦煌遺書など新資料への探求心が高潮したことを示すのではないか。

翻って趙萬里の場合は、どうだったか。我々は、敦煌本『文心雕龍』を扱った當時、彼が清華學校に在ったことを思い返すべきだろう。しかも直接の上司は、かの王國維であった。

王國維が自ら命を絶ったため、導師と助教という二人の關係は、そう長く續かなかった（1925–1927）。ただ趙萬里は王の年譜を編み、遺著を集成している。まだ弱年だったこともあって、趙はこの同郷の先輩から絶大な影響を受けた。王に親炙した時期、趙は七十種もの古籍を校勘し、記錄を陸續と發表した。『文心雕龍』の校勘は、その成果の一つだった。王國維が敦煌學を創始した人物の一人であることは、贅言を要さない。趙萬里がS.5478と刊本『文心雕龍』の對校に攜った一因は、そういった新出資料を含む古典文獻への重視という師の學風による感化に在ったのではないか。この見方が正しければ、日中の中國學界に存した風氣との關わりにおいて、鈴木の場合との共通性が想像され、實に興味深く思われる。

六、『文心雕龍』研究史における鈴木虎雄と趙萬里の校勘記

S.5478と『文心雕龍』の刊本の異同を列擧する點、また四・五百條という數は、鈴木と趙萬里の作業で異なるところは無い。しかし用いた底本（鈴木は黃叔琳本、趙は明刊本）が違う他、二人の校勘には等しくない側面が見られる。いま兩者を詳しく分析する餘裕は無いが、一例として趙萬里「唐寫本文心雕龍殘卷校記」で校勘に關わる最初の條を擧げよう。

徵聖第二（唐寫本篇名均頂格寫）[20]

篇名を一々改行して寫すことを示した注記が見える。寫眞を附さない校勘記だと、原寫本がどのように書寫されているかという、この種の注記は他では特に珍しくもない。だが、鈴木の校勘にはこういった記述は、全く見られない。そのことは、校勘・版本學の大家としても後に名を成す趙萬里と異なって、鈴木の關心がテクストの内容にしかない點を示すだろう。

[20]趙萬里（1926）97頁、同（2012）358頁。行格・避諱にも趙は注意を怠らない。第三節に引く「唐寫本文心雕龍殘卷校記」の前書きを見られたい。

いったい、『文心雕龍』は現代における盛名に比して、日本ではよく讀まれた典籍というわけではない。近代の學術研究が始まる段階では、過去の蓄積はほとんど無かった[21]。その中で鈴木の同書に基づく文學論の分析[22]は、研究の先鞭をつけるものだった。敦煌本を用いる校勘は、彼が重視して止まないこの文獻の讀みをより確實にする意圖に出ていよう。日本での狀況に比べると、さすがは本國だけあって、中國では注釋・校勘など同書に關する若干の論著が、前近代から生み出されてきた。二十世紀以降、『文心雕龍』にも新しい文學研究の手法が用いられるようになる[23]。そういった中で、趙萬里の校勘記は、必ずしも文學論を主題とした研究を志向しないと見られる。鈴木のそれとの性格の差は、これとも關わろう。

もちろん兩者の校勘が、續く『文心雕龍』の研究に及ぼした影響は小さくない。校勘と注から成る『文心雕龍注』は、今も版を重ねる注釋書である。その「例言」の冒頭にこういう。

> 一、文心雕龍以黃叔琳校本爲最善、今卽依據黃本、再參以孫仲容先生手錄顧［千里］黃［堯圃］合校本、譚復堂先生校本、及近人趙君萬里校唐人殘寫本。畏友孫君蜀丞尤助我宏多、［孫君所校有唐人殘寫本、明抄本太平御覽、及太平御覽三種。］書此識感[24]。

范文瀾（1893–1969）は民國十八年（1929）九月に『文心雕龍注』上・中册を初めて上梓した。彼がそれより三年前に公表された趙萬里「唐寫本文心雕龍殘卷校記」を利用したことが、ここに擧げた文章から見て取れる。更に七年後（1936）の七月、彼は『文心雕龍注』の新版を公刊する。その「例言」では、舊版で「及近人趙君萬里校唐人殘寫本」とあった一句が「鈴木虎雄先生校勘記、及友人趙君萬里校唐人殘寫本」と改められている。この「例言」に續いて、鈴木「黃叔琳本文心雕龍校勘記」（1929 年 4 月）の「緒言」と「引用書目」が全て引用される[25]。范文瀾は校勘では隨處に、注釋でも鈴木の說を十七箇所で引證する[26]。

もとより、そこには鈴木の學問が中國の學界でも相應の盛名を博したことが、范文瀾をしてその業績に着目させたという事情はあるだろう[27]。ただ、鈴木と趙が對校の成果を公にして數年で、早々とそれらは依據すべき研究と見做されていた。

[21]興膳宏（2008）279–295 頁、門脇廣文（2005）368–426 頁參照。
[22]鈴木虎雄（1925）94–111 頁。
[23]張少康（2001）1–185 頁參照。
[24]范文瀾（1929）3 頁「范文瀾所論第四種文心雕龍注例言」に據る。
[25]范文瀾（1936）卷首。同（2002）6–15 頁まで後の諸本は、皆この內容を引き繼ぐ。
[26]黃端陽（2012）223 頁。范文瀾による『文心雕龍』については黃氏の書が參考になる。
[27]鈴木の古典文學に關する著述は、鈴木虎雄（1925）が同（1928・1929）として早くに漢譯されるなど、民國の學者にも一定の知名度を得ていた。なお、鈴木が『文心雕龍』を研究した手法が范文瀾に影響を與えたという吉川幸次郎氏による推測が東方學（1976）155 頁に見える。

否、『文心雕龍』のテクスト分析が當時とは比較し得ないほどに格段の進歩を遂げた今日でも、敦煌本を用いた校勘[28]が（范文瀾が用いなかった鈴木「燉煌本文心雕龍校勘記」に觸れる中國の研究は少ないにせよ）常に兩者の論著に言及するなど、大筋でこの點に變化は見られない。その意味において、1920年代の時點で敦煌本にいち早く注目した彼らの炯眼は、改めて評價されるべきだろう。

七、おわりに

趙萬里の方もそうだが、鈴木による『文心雕龍』の校勘には、古寫本を扱う研究として、相當に不充分な側面があると感じられる。モノとしての寫本に對する關心が甚だ薄いこと、卽ち行格や書寫の形式に全く顧慮を拂わぬことが、それである（第二節・第六節）。鈴木には、『文鏡秘府論』、『白氏文集』の古鈔本を用いた同時期の文章もあるが、この傾向はそれらにも共通する[29]。本領の古典文學・文學論に關わる情報のみが、そこでは抽出される。

もとより、S.5478に關する文獻學上の研究（注5）が重ねられた今日から、その不足を指摘することは容易い。しかし、鈴木自身の關心の在り方や、書誌的な情報（例えば縱十七センチメートル、橫十二センチメートルといった事實）と鮮明な寫眞を内藤が持ち歸ったか[30]という事情も考慮する必要があるだろう。『文鏡秘府論』や『白氏文集』の古寫本を本格的に取り上げた近代の研究者は、鈴木をもって嚆矢とする。『文心雕龍』の校勘と併せて、古文書學の確立前における、鈴木のこれら寫本を用いた研究が持つ先驅性は否定し難い。

繰り返しになるが、同じ講座の先輩教授である狩野直喜などと比較して、鈴木は新領域への興味が薄い研究者と見做される。實際には、王國維の論著を紹介するなど、それまで學界で顧みられなかった中國の詞曲に對する關心を、彼は早くに有していた[31]。ただし、これは1910年代中頃までのことであって、この後は專門である古典詩文の研究に沈潛することになる。そのような鈴木ではあるが、彼に敦煌文獻を目睹する機會が無かったわけではない。

> 須知學術無疆域、誰道人閒有黃白。旅食兩京殊不惡、何唯眼福飽琳瑯
> ［眼福飽琳瑯、斥英法二圖書館所儲敦煌石室遺書、及西域殘簡古畫］。

[28]その後の主な業績として潘重規（1970）と林其錟・陳鳳金（2011）23–194頁がある。

[29]鈴木虎雄（1923）、同（1927）156–231頁。後者は所收書の目次では1926年の執筆とされる。顧みる者の稀な資料を扱う先進性でも、S.5478の研究とこれらは一脈通じる。

[30]内藤の將來したS.5478の寫眞は「敦煌鈔本寫眞帖」中の一册として、一部を京都大學東洋史研究室が藏したという記錄がある（現物は未見）。梶浦晉（2002）114–115頁。

[31]京都帝國大學では詞曲を題材とする講義も擔當していた。錢鷗（1994）90–99頁參照。

（『君山詩艸』「次鈴木豹軒教授將遊歐洲留別韵[32]」）

昭和四年（1929）七月、鈴木は歐州視察の旅に赴く。それを見送る狩野直喜（號は君山）の詩（三首連作の第三首）から末四句を引いた。學問に「黃白」（アジア人とヨーロッパ人）の別は無い、「兩京」（ロンドンとパリ）に滯在する意義は「眼福」を得ることだけではない、と狩野は概ねこう述べる。かく「眼福」のみが目的ではないと言われたからでもあるまいが、鈴木は英佛滯在中に狩野が自注で擧げた「敦煌石室遺書」を目睹することは無かったようだ。

また、西洋人の漢学に觸れようともしなかったらしい。詩集『豹軒詩鈔』卷十一に收める當時の作品に徵する限り、かかる形跡は見出せない。確かに八月二十日にロンドン着、九月にパリ着、同月下旬より他國を歷訪してから十月十九日にパリへ戻って、十一月一日に同地を發するという強行軍では、資料の調査などままならないかもしれない。彼が望んだにせよ、大英博物館當該部門の閉鎖性などを思えば寫本を閲覽できるかという問題もあったろう。だが、「杜詩」など傳統詩文を「守りつづけた」學風（第五節、注 19）と相俟って校記二篇で自ら扱った唐鈔本『文心雕龍』の現物に興味が無いかの如き態度は、内藤虎次郎や狩野（實は内藤や董康より早く S.5478 の存在を知っていた[33]）とは、好對照を成すものといえよう。

傳世の稀覯本については豐かな研究業績を殘した趙萬里も、こと出土文獻に限れば、類似の研究態度を持つ。鈴木と趙が敦煌本『文心雕龍』の校勘に從った事實は、兩者を圍繞する學術上の風氣とは無關係ではあるまい。1920 年代の中國學界に廣く存した新發見資料への高い關心は、それと距離を保つ彼らにすら影響を與えていた。京都と北京という二つの土地での草創期敦煌學の熱氣、内藤や王國維、また董康などを媒介とした學術上のネットワークが存在した事實を示す一現象として、このことは少しく注目を受けてよいと考えられる。

参考文獻一覽

（著者名等の後に括弧で挾んだ數字はその論著の發表・出版年を意味する）

【日本語によるもの】

網祐次（1969）：「そぞろごと」、吉川幸次郎（1969）月報

[32]狩野の詩集である狩野直喜（1960）に據って、假に句讀點を補った。

[33]藝文（1914）で狩野が前年に見たスタイン所獲文獻を擧げる中に「行草體の横帳となれる文心雕龍あり」、瀧精一（1913）33 頁に「佛典以外には狩野氏の發見に係る文心雕龍の一册中唐草體の細書至妙と申すべく、本文異同の研究亦頗る重要なるもの有之候」とある。狩野が S.5478 を『文心雕龍』に比定したことと内藤の寫眞將來、鈴木による研究との關係を分析することは、關連資料が公開されることを俟ちつつ、他日の課題としたい。

梶浦晉（2002）：「大正・昭和前期の京都における敦煌學」、高田時雄（2002b）

門脇廣文（2005）：『文心雕龍の研究』（創文社）、小論關連部分は各々「《文心雕龍》の《古今和歌集》眞名序への影響について」、「鎌倉室町時代・江戸時代前半における《文心雕龍》受容の歴史」、「江戸時代後半における《文心雕龍》受容の歴史」として『人文科學』4（1999 年）、同 5（2000 年）、同 6（2001 年）に初出。

狩野直喜（1960）：吉川幸次郎・狩野直禎校字『君山詩艸』

神田喜一郎（1984）：『神田喜一郎全集』9（同朋舎出版）、小論關連部分は「敦煌學五十年」、「狩野先生と敦煌古書」として『龍谷史壇』38（1953 年）、『東光』5（1948 年）に初出。

藝文（1914）：（無署名）「彙報　京都文科大學内諸學會記事　支那學會」、『藝文』5–3

藝文（1924）：内藤虎次郎・鈴木虎雄「詩七首」、『藝文』15–12

玄幸子・高田時雄（2015）：玄幸子・高田時雄編著『内藤湖南敦煌遺書調査記錄』（関西大學出版部）

興膳宏（1995）：『異域の眼――中國文化散策』（筑摩書房）、小論關連部分は「東洋學の系譜 10 鈴木虎雄」として『月刊しにか』1991–1（1991 年）に初出。

興膳宏（2008）：『新版中國の文學理論』（清文堂出版）、小論關連部分は彭恩華譯「日本對《文心雕龍》的接受和研究」として朱東潤・李俊民・羅竹風主編『中華文史論叢』34（上海古籍出版社、1985 年）に初出。

書菀（1942）：書道博物館藏「西域出土寫經」、『書菀』6–9（1942 年）

鈴木虎雄（1923）：「文鏡秘府論を校勘して」、『支那學』3–4

鈴木虎雄（1925）：『支那詩論史』（弘文堂書房）、小論關連部分は「魏晉南北朝時代の文學論（第四回）」、「同（第五回）」として『藝文』11–2、11–3（1920 年）に初出。

鈴木虎雄（1926）：「燉煌本文心雕龍校勘記」、内藤博士還暦祝賀會編『内藤博士還暦祝賀支那學論叢』（弘文堂書房）

鈴木虎雄（1927）：『業閒錄』（弘文堂書房）

鈴木虎雄（1929）：「黄叔琳本文心雕龍校勘記」、斯文會編輯『支那學研究』1（斯文會）

鈴木虎雄（1938）：鈴木虎雄撰、鈴木教授還暦記念會編輯『豹軒詩鈔』（弘文堂書房）

高田時雄（2002a）：「敦煌韻書の發見とその意義」、高田時雄（2002b）

高田時雄（2002b）：高田時雄編『草創期の敦煌學』（知泉書館）

高田時雄（2003）：「敦煌寫本を求めて――日本人學者のヨーロッパ訪書行」、『佛教藝術』271

高田時雄（2008）：「内藤湖南の敦煌學」、『東アジア文化交渉研究』別册 3

瀧精一（1913）：「節庵來信一節」、『國華』278

東方學（1976）：吉川幸次郎・鈴木脩藏・倉田淳之助・中田勇次郎・小川環樹「座談會「先學を語る」――鈴木虎雄博士」、『東方學』52

内藤虎次郎（1970）：『内藤湖南全集』12（筑摩書房）、小論關連部分は「歐洲にて見たる東洋學資料」として『新生』1–1（1926 年）に初出。

内藤虎次郎（1976）：『内藤湖南全集』14（筑摩書房）、小論中に引く漢詩は内藤虎次郎編『航歐集』（1926 年）にも見える。

中村不折（1927）：『禹域出土墨寶書法源流考』（西東書房）

吉川幸次郎（1969）：『吉川幸次郎全集』17（筑摩書房）、小論關連部分は「鈴木虎雄先生の功績――傳承と創始」として『圖書』163（1963 年）に初出。

吉田町教育委員會（1964）：吉田町教育委員會編集『名譽町民豹軒鈴木虎雄先生』（吉田町教育委員會）

芳村弘道（2010）：「留滬半年經眼書錄抄（下）」、『學林』50

【中國語によるもの】

黄端陽（2012）：『范文瀾《文心雕龍注》研究』（文史哲出版社）

史睿・王楠（2011）：「董康《敦煌書錄》的初步研究」、樊錦詩・榮新江・林世田主編『敦煌文獻・考古・藝術綜合研究――紀念向達先生誕辰 110 周年國際學術研討會論文集』（中華書局）

鈴木虎雄（1928・1929）：孫俍工譯『中國古代文藝論史』上・下（北新書局）

張少康（2001）：張少康・汪春泓・陳允鋒・陶禮天『文心雕龍研究史』（北京大學出版社）、小論關連部分は張・汪・陳三氏が執筆。

趙萬里（1926）：「唐寫本文心雕龍殘卷校記」、『清華學報』3–1

趙萬里（1943）：「魏宗室東陽王榮與敦煌寫經」、『中德學誌』5–3

趙萬里（1961）：斐雲「唐寫本說苑反質篇讀後記」、『文物』1961–3

趙萬里（2011）：趙萬里著、冀淑英・張志清・劉波主編『趙萬里文集』1（國家圖書館出版社）

趙萬里（2012）：同前著、同前主編『趙萬里文集』2（同前）

趙芳瑛・趙深（2011）：趙芳瑛・趙深編、胡拙整理「趙萬里先生傳略」、趙萬里（2011）

東莞市政協（2004）：東莞市政協編『容庚容肇祖學記』（廣東人民出版社）

潘重規（1970）：『唐寫文心雕龍殘本合校』（新亞研究所）

范文瀾（1929）：『文心雕龍注』上册（文化學社）

范文瀾（1936）：『文心雕龍注』（開明書店）

范文瀾（2002）：『范文瀾全集』4（河北教育出版社）

林其錟・陳鳳金（2011）：『增訂文心雕龍集校合編』（華東師範大學出版社）、小論關連部分は「敦煌遺書《文心雕龍》殘卷集校」、林其錟「《文心雕龍》主要版本源流考略」として各々『中華文史論叢』43（上海古籍出版社、1988年）、《慶祝王元化教授八十歲論文集》編委會『慶祝王元化教授八十歲論文集』（華東師範大學出版社、2001年）に初出。

（作者は京都大學人文科學研究所准教授）